

それは、学校と家庭の中間にある放課後という時間帯は、解放感や心身の疲労などから、子どもの「心のたが」がゆるみ、子どもが、目に見えない何かに突き動かされるように高ぶり、抑圧された不安や不満、苛々を奔放に表出する傾向がある、ということ です。

したがって、個人差はありますが、放課後の児童館は、児童が学校や家庭とは異なる一面を見せる場であり、その子の「成長上の課題」が一日の中で最も浮き彫りになる時間帯と申し上げても過言ではないと思います。

このような、児童館における児童の傾向性に対して、立科町児童館が、日々、特に苦慮している実態及び課題は、次の三点かと存じます。

一、取り返しのつかない事故が起こらないように、来館児童に事前に注意を呼びかけているが、活動区域が広く、どうしても全来館児童のすべての行動に目が届かない面がある。そこで、大人から守ってもらう安全に慣れ、自ら危険を察知し、未然に回避したり、防いだりする「安全感」が身に付いていない児童に、家庭及び学校と連携して、いかに自分の安全は自分で守る「安全感」を育むか、が大きな課題と受け止めている。

二、テレビやゲームの影響と思われるが、

玩具の包丁や果物ナイフを本来のままごと遊びに使わず、小指を刃の側(逆手?)にして握り、何人かで激しく斬り刺し合う姿が見られた。遊びを逸脱した危険と殺伐とした雰囲気を感じ、「それは止めようよ。危険だし、見ていても怖い感じがする。」と注意した。しかし、何度も繰り返すので、今は玩具の刃物は引き上げてある。このような、「心のたが」がゆるみ、何度注意しても同じことを繰り返す児童に、言葉で納得させることは非常に難しく、厚生員としての力不足を痛感しながら、その指導及び支援に苦慮している。

三、玩具のナイフならぬ、「言葉のナイフ」で人の心を傷つけたり、対人関係において絶対に口にしてはならない、甚だしく礼を失する言葉をあっけらかんと発したり、また、つい感心してしまっただけに勝手に身勝手な言い逃れをしたりするケースが確実に増えている。指導しても、「どうしていけないの? 本当のことなのに、なんで言っちゃいけないの?」(僕(私)は、言われたって、全然平気なのに、どうしていけないの?)と言いつける。このような、対人関係の基本的なマナーが身に付いていない児童に、言葉は時には鋭利な

ナイフになることを説諭によって理解させることの大変さを痛切に感じている。

立科町児童館が、より充実した児童館活動を推進し、よりいっそう子どもの健全な成長を促す場であるためには、今子育て及び教育の大切なパートナーである保護者(家庭)と厚生員(児童館)の信頼に基づいた連携の絆をさらに太く、強くすることが求められていると思えます。

そのためには、冒頭のような児童館の目的や活動内容、課題などに関する親御さんのご理解が不可欠かと存じます。

と申しますのは、児童館に対して、多くの方が、「放課後、子どもを短時間預けておく託児的な施設」「子どもが自由に遊べる場」「便利で、安全な待ち合わせ場所」といったイメージを抱いており、存外、児童館の役割をご存知ないからです。もちろん、このイメージのような役割も果たしていますが、児童館の活動の主たるは、児童の人格の発達を促すことにあります。

親御さんには、児童館の役割を十分理解されると同時に、ぜひとも、児童館で起こっていることに注目していただきたい

いと存じます。

放課後の児童館は、児童が学校や家庭とは異なる一面を見せる場であり、家庭や学校ではほとんど玩具のナイフや「言葉のナイフ」を振り回さない子が、児童館では振り回すことがあるからです。

その子の「成長上の課題」が一日の中で最も浮き彫りになる時間帯に起こっていることに関心を抱き、家庭と児童館が細やかに連絡を取り合い、児童館における児童の行為の本源的な意味を考え合うことが大切です。そして、親身に支援し、教えるべきことは子どもが納得できるまで何度でも教えることが肝要かと存じます。

乳幼児期に欠落した「成長上の課題」は、思春期になるまで子どもの心に潜在し、思春期以後に突発的な問題行動として表出されることがあるそうです。(「0歳児の保育」平井信義編著)

立科町児童館の厚生員の方が日々苦慮されている、玩具のナイフの事例が示唆する問題と「言葉のナイフ」の問題は、「第二の乳幼児期」とも言われる思春期に、親や教師の目の届かないネット社会の「影」の部分と複雑に絡み合い、いじめの問題として一気に噴き出す虞がありますので、くれぐれも看過されないうことです……。